

# 日本語二重主格文

—— 意味役割理論からの提案 ——

加 賀 信 広

## 1. はじめに

本小論では、1つの節にガ格要素が2つ現れる、いわゆる二重主格文を取り上げるが、その中でもとりわけ、(1)のような文に焦点を当てることにしたい。

- (1) a. 象が鼻が長い。
- b. 太郎が体調が悪い。
- c. 田中さんが奥さんが美人だ。
- d. 山田さんが家が立派だ。
- (2) a. 象の鼻が長い。
- b. 太郎の体調が悪い。
- c. 田中さんの奥さんが美人だ。
- d. 山田さんの家が立派だ。

(1a-d)の文は、(2a-d)の所有名詞句を含む文と知的意味がほぼ同一であるとみなし得るタイプの二重主格文である。そのため、従来の研究では、(1)のタイプの二重主格文は、(2)の所有主格文とのなんらかの関連付けの下で分析が図られることが多い。

一方、(3)の二重主格文は、所有関係に基づく(2)のような書き換えはできない。パラフレーズを行うとすれば、最初のカ格表現をニ格表現に換えることが考えられる。

- (3) a. 田中さんが英語が話せる。
- b. ロサンゼルスが日本人が多い。
- (4) a. 田中さんに英語が話せる。
- b. ロサンゼルスに日本人が多い。

また、所有名詞句にも二格にも書き換えることができない種類の二重主格文もある。'

- (5) a. 花子がアイスクリームが好きだ。  
 b. 太郎がテニスが上手だ。

本稿では、最初に述べたように、(1)のタイプの二重主格文に焦点をしぼり、従来の分析を簡単に振り返ったあとに、加賀(2001)で提示された意味役割理論の枠組みを踏まえて、新たな分析を提案することにした。

## 2. 移動分析と基底生成分析

(1)のタイプの二重主格文に関する従来の分析には、大別すると、移動分析と基底生成分析の2通りがある。

前者は、(1)の二重主格文の基底に(2)の所有名詞句を含む文と共通の構造を仮定した上で、所有者上昇 (possessor ascension) などの規則により(6)のような構造を派生しようとするアプローチである。

- (6) [ 象が [ [ 鼻 ] が 長い ] ]

このような移動規則を仮定する分析には、主語化 (subjectivization) 規則を提案した Kuno (1973) を初めとして、Kuroda (1986), Fukuda (1991), Ura (1996), 金 (2002) など多数の先行研究がある。移動分析が優れているのは、たとえば「象が鼻が長い」において、述部「長い」の意味上の主語はあくまで「鼻が」であって、いわゆる大主語 (major subject) である「象が」は「長い」と直接的な叙述関係を結んでいるのではない、という直観をしっかりと捉えることができる点である。(6)の構造において、もともと主語名詞句に埋め込まれていた「象が」は痕跡を通して「鼻」の〈所有者〉としての解釈をうけることになる。一方、「象が」と述部「長い」の関係は、構造的にも意味的にも間接的である。このように移動分析では、二重主格文における主述関係および所有関係を構造に基づいて的確に捉えることができる。この点に関する高い評価が、移動分析が二重主格文の研究において多くの支持者を得るに至っている所以であると考えられる。

一方、基底生成分析は、井上(1980)やSaito(1982)、Yoon(1987)などで採用されている。彼らは、(7)のような句構造規則を認めることにより、大主語も基底構造で生成することを提案する。<sup>3</sup>

$$(7) \quad S' \quad \rightarrow \quad \left\{ \begin{array}{c} NP \\ PP \end{array} \right\} S$$

[Nom.]

(7)の規則は、一見したところ、主題(topic)を導入する規則と似ているが、Sに先行する要素が主題の「は」ではなく、「が」(nominative)によって格表示される場合は、「焦点」(focus)としての機能をもつとみなされる。<sup>3</sup>すなわち、基底生成分析では、大主語は、文頭に生じて焦点として働く主格表現と特徴付けられることになる。

移動分析と基底生成分析のそれぞれの問題点をみてみよう。上で述べたように、移動分析は、二重主格文における主述関係および所有関係を的確に捉えているという点で優れているが、すでに問題点もいくつか指摘されてきている。たとえば次の文を考えてみよう。

- (8) a. 雨の日が多い。  
       b. 原監督の巨人軍が強い。
- (9) a. \*雨が日が多い。  
       b. \*原監督が巨人軍が強い。

(8)の連体修飾表現を含む文は適格であるのに対して、(9)の二重主格文は非文法的である。このことは、「～の」の連体修飾要素は何でも主語の外に取り出して大主語にできるというわけではなく、一定の意味条件(〈所有者〉と〈所有物〉の関係など)を満たしている場合にのみ、二重主格文を作るための移動規則が適用可能であることを示している。このような意味条件をどのような形で移動規則の適用条件に組み込むことができるかは、今のところ明らかにはなっていないと思われる(Saito 1982, 天野1990など参照)。<sup>4</sup>

また、次のような文にみられる文法性の違いも、移動分析にとっては難しい問題になるように思われる(Saito 1982を参照)。

- (10) a. ジョンの息子が驚いた。  
 b. ??ジョンが息子が驚いた。
- (11) a. ジョンの息子が学生です。  
 b. ジョンが息子が学生です。

(10b) と (11b) の二重主格文は、述部の部分が異なるだけであるが、その文法性にははっきりと差が認められる。この文法性の違いは、さまざまな文献ですでに指摘されているように、(11b) が大主語であるジョンの属性ないし特性について述べる文になっているのに対して、(10b) ではそのような特性記述の解釈が行いにくいという違いに起因していると考えられるが、このような意味的な要因に発する文法性の相違を移動分析にどのように組み込むことができるかは、やはり今のところ不明であると言わざるを得ない。

さらに、次のような文の派生について考えてみたい (Yoon 1987を参照)。

- (12) a. 文明国の男性の平均寿命が短い。  
 b. 文明国の男性が、平均寿命が短い。  
 c. 文明国が、男性の平均寿命が短い。
- (13) a. 日本の経済の停滞が著しい。  
 b. 日本の経済が、停滞が著しい。  
 c. 日本が、経済の停滞が著しい。

移動分析によれば、(12-13) の (b, c) の文は、それぞれの(a)の文と共通の構造から派生されることになる。(12-13) の(b)の文の派生は問題ないとしても、(c)の文の派生には理論的な問題が生ずると思われる。それぞれの文の基底構造は、(14 a, b) のようになるはずであるが、この構造から「文明国」と「日本」を名詞句の外に移動させる操作は、いわゆる「Aの上のA条件」(A-over-A condition) に違反してしまうからである。<sup>5</sup>

- (14) a. [[[文明国] (の) 男性] (の) 平均寿命] が短い  
 b. [[[日本] (の) 経済] (の) 停滞] が著しい

「文明国」や「日本」などの深く埋め込まれた指定辞 (specifier) 要素を取り出すような統語操作がもし仮定できるとすれば、この問題点は解消する可能性

もあるが、今のところは、それがどのような操作であるかは明らかにはなっていないように思われる。

以上のように、移動分析は、二重主格文における主述関係および所有関係を構造に基づいて的確に捉えることができるという利点をもつものの、妥当な分析として認められるためには解決すべき問題点がいくつか残されていると考えられる。

一方、基底生成分析では、移動分析に対して指摘された意味的な問題点は、基底生成される焦点要素と後続する叙述要素(S)との間に成立すべき意味的条件として規定することにより、解決できる可能性があるように思われる。実際にこれまでの研究において、たとえば Masuoka (1982) では「特徴付け」(characterization), 天野 (1990) では「性質叙述」などの用語を用いて、二重主格文の成立条件が提示されてきている。なぜそのような条件が必要になるのかの議論は別として、二重主格文の成立にはそのような意味的關係が必要であることは間違いないことであると思われる。

(7)のような句構造規則を仮定して大主語を基底構造で生成しようとするアプローチにとって一つの大きな問題になるのは、二重主格文の大主語が常に焦点としての機能をもつとみなせるかどうかという点である。(7)において、通常の主語とは異なり、Sの前に生成され主格を与えられるいわゆる大主語は、焦点要素と特徴付けられることになるが、この特徴付けが妥当なものかどうかという問題である。

この点については、すでに先行研究においてかなりの議論が行われてきている。それを簡単にまとめてみると、独立文では、二重主格文の大主語は常に焦点の役割をにない、久野 (1973) が言う「総記」(exhaustive listing)の解釈が与えられる。これは、述語が恒常的状态や特性をあらわす場合に主語の「が」格要素は「総記」の解釈をうけるという一般化に合致しており、むしろ、その一般化の下位事例として理解することができる。しかし、その一般化が崩れる場合があることも知られている。すなわち、従属節の中では、述語が恒常的状态や特性をあらわしていても、主語の「が」格要素が中立叙述の解釈をうける場合がある。二重主格文の大主語の場合にもこれは当てはまり、Masuoka (1979) や杉本 (1995) で指摘されているように、従属節では二重主格文が中立叙述の解釈になり、大主語が焦点とみなされない事例が可能である。たとえば次の (15a-c) のような例である。

- (15) a. 子供でも、象が鼻が長いことを知っている。  
 b. 誰もが、太郎が成績がいいことを知っている。  
 c. 誰もが、太郎が弟がハンサムなことを知っている。(杉本1995)

これらの例で「象が」や「太郎が」には焦点の読みを与える必要がない。そうすると、二重主格文の大主語を構造的に焦点要素として生成する(7)の規則は、独立文の場合にはうまく扱えるが、従属節の場合には不適切な予測をしてしまうことになり、経験的に十分な妥当性をもつとは言いにくいと思われる。

独立文と従属節で解釈の可能性に違いがでるのは、Kuroda (1972) の意味における「判断」(judgment) がかわっているからであると考えられる。Kaga (1996) で議論したように、文が恒常的状态や特性をあらわす述語を含む場合は、「二重判断」(categorical judgment) の事例となるために、主語の「が」格要素が「評言」(comment) の機能、すなわち、焦点の解釈をもたなければならない(焦点の解釈を生み出す具体的メカニズムについては Kaga 1996 を参照されたい)。したがって、独立文のように(話し手の)判断の表明を含む環境に二重主格文が生ずると、大主語は常に焦点の解釈を与えられることになるわけである。しかしながら、文や節は常に(話し手の)判断の表明を含むわけではない。判断を含まない環境、すなわち、(15)の従属節のような環境では、「二重判断」的解釈を行う必要がないために、「が」格要素に「評言」の機能を付与することも必要とされない。したがって、そのような環境では、二重主格文の大主語は焦点の読みを行わなくてもよいわけである。

Kuroda (1972) の「判断」という概念に基づく以上の説明が妥当であるとする、二重主格文の基底生成分析が仮定するような、大主語が常に焦点要素であるという想定は根拠を失うことになる。大主語は、従属節では焦点ではない中立的な解釈が可能であるし、また、独立文においては通例焦点としての解釈をうけるが、その特性も二重主格文の本来的性質というよりは、「判断表明」の環境において「判断」の種類との関連で生ずる派生的性質であると考えられるからである。このようにみえてくると、基底生成分析が仮定する(7)の句構造規則は、二重主格文を生成する一般的メカニズムとしては適切性に欠けると結論しなければならない。

本節では、二重主格文の移動分析と基底生成分析をおもに批判的な観点から概観した。

### 3. 加賀 (2001) の意味役割理論

加賀 (2001) では、意味役割に関する伝統的な場所理論を批判的に検討した上で、Larson 流の動詞句シェル構造に依拠する意味役割理論を提示した。その意味役割の構造を日本語に即して主要部後続の語順で示すと、(16)のようになる。

(16) [VP<sub>1</sub> 動作主 [V<sub>1</sub> [VP<sub>2</sub> 場所 [V<sub>2</sub> 存在者 V<sub>2</sub>] V]]

この構造では、「動作主」「場所」「存在者」というマクロな意味役割がそれぞれ、VP<sub>1</sub>の指定部、VP<sub>2</sub>の指定部、VP<sub>2</sub>の補部の位置に貼り付けられている。本論では、この(16)の構造に基づいて二重主格文の分析を行うが、本論の議論との関連でとりわけ重要になるのは、次のような文の扱いである。

- (17) a. ジョンが賢い。  
 b. ジョンが空腹だ。
- (18) a. John is wise.  
 b. John is hungry.

(17)と(18)は、ジョンの恒常的ないし一時的状態を記述している文である。伝統的な意味役割分析では、これらの文は、主語のジョンが存在者 (Theme) で、形容 (動) 詞の述語が場所 (Location) の役割をもつと考えられてきた。一方、加賀 (2001) の分析では、(17) - (18)が記述する状況は、「賢い」ないし「空腹だ」という述語があらわしている特性をジョンが保有している状況であるとみなし、主語のジョンを「場所」として、述語を「存在者」として分析することを提案した。

加賀 (2001) の分析は、(17) - (18)のような状態文に対して、従来の分析とはまさに裏返しの意味役割パターンを仮定するわけであるが、たとえば (17a) の (基底での) 構造は(19)のようになる (「動作主」はここではかかわらないので、表示から除くことにする)。<sup>6</sup>

(19) [VP<sub>2</sub> ジョンが [V<sub>2</sub> 賢い V<sub>2</sub>]]

ここで一つ注目しておくべきは、この構造は、(20)のような所有文がもつ構造と平行しているということである。

- (20) a. 太郎 {が/に} 奥さんがある。  
 b. 太郎 {が/に} りっぱな家がある。  
 (21)  $[_{VP_2}$  太郎 {が/に}  $[_{VP_2}$  {奥さんが/家が} ある (V<sub>2</sub>) ]

(19)のジョンは特性の「所有者」であり、(20)の太郎は親族ないし物体の「所有者」であるが、両者とも広い意味において「所有者」としてまとめることができるというのが加賀 (2001) の考え方である。これに対して伝統的な分析では、(17) - (18)タイプの文の主語が存在者 (Theme)と分析されるために、所有文との平行性は仮定できないことに注意されたい。

#### 4. 二重主格文の分析

本節では、加賀 (2001) で提示された意味役割理論の枠組みに基づいて、二重主格文とそれに関連する所有主格文の分析を提案する。

分析の対象となる文は、(1) - (2) (再掲) のような文である。

- (1) a. 象が鼻が長い。  
 b. 太郎が体調が悪い。  
 c. 田中さんが奥さんが美人だ。  
 d. 山田さんが家が立派だ。  
 (2) a. 象の鼻が長い。  
 b. 太郎の体調が悪い。  
 c. 田中さんの奥さんが美人だ。  
 d. 山田さんの家が立派だ。

まず、(1)の二重主格文も(2)の所有主格文も共に、基底で生成される構文であると考えことにしたい。すなわち、二重主格文の移動分析は採らない。それでは、どういう構造で基底生成されるのかという問題であるが、(16)の構造を仮定した上で、(1)の文も(2)の文も VP<sub>2</sub> の領域に生成されると考えたい。

(2)の所有主格文は、主語の「象の鼻」「太郎の体調」「田中さんの奥さん」「山



田さんの家」に関してそれぞれ、「長い」「悪い」「美人だ」「立派だ」という特性を述べている文である。したがって、主語は特性の「所有者」として「場所」の位置に生成され、特性をあらわす述語は「存在者」の位置に生成されると分析できる。すなわち、(22)のような構造である。

(22) [vp<sub>2</sub> 象の鼻が [v<sub>2</sub> 長い V<sub>2</sub>]]

これに対して、(1)の二重主格文は、大主語の「象」「太郎」「田中さん」「山田さん」に関してそれぞれ、「鼻が長い」「体調が悪い」「奥さんが美人だ」「家が立派だ」という特性を述べている文であると解釈できる。この解釈に従うと、その構造は(23)ようになる。

(23) [vp<sub>2</sub> 象が [v<sub>2</sub> [鼻が 長い] V<sub>2</sub>]]

すなわち、大主語が特性の「所有者」として「場所」の位置を占め、特性をあらわす表現は小節 (small clause) を成して「存在者」の位置に生じるという分析である。<sup>7</sup>

この分析では、(1)の二重主格文と(2)の所有主格文の違いは、特性の保有者としての「所有者」にどのような主体が取り立てられるかの違いに起因していることになる。つまり、「象」が「所有者」に立つか、「象の鼻」が「所有者」に立つかの違いである。(23)の二重主格文の構造が、意味役割の観点からみて妥当であるのは、これとほぼ同じ意味をあらわすと考えられる (24a) の文が、(23)と平行的な構造になることで確かめることができる。

(24) a. 象が長い鼻をもつ。  
b. [vp<sub>2</sub> 象が [v<sub>2</sub> [長い鼻] を もつ (V<sub>2</sub>) ]]

(24a) は、伝統的な意味役割の分析でも、主語が「所有者」で目的語が「存在者」(Theme) と特徴付けられる文であるが、二重主格文 (1a) との意味的な平行性は明らかであると思われる。

また、二重主格文に相当する英語の表現をみるのも有益である。(25a-b) に対応する自然な英文を求めると、(26a-b) のようになると思われる。

- (25) a. メアリーは髪がきれいだ。  
 b. メアリーは頭が痛い。
- (26) a. Mary has beautiful hair.  
 b. Mary has a headache.
- (27) [v<sub>12</sub> Mary [v<sub>2</sub> has (V<sub>2</sub>) (beautiful hair/a headache) ]]

(26 a-b) の have を主動詞とする文は、(27)の構造で示すように、主語が「場所」、目的語が「存在者」の意味役割をもつと分析するのが自然である。(25a-b) の日本語に同様の構造を仮定することの一つの補強証拠になると思われる。

二重主格文に対して(23)の構造を与えるわれわれの分析は、従来の移動分析や基底生成分析にとって問題になっていた点を解消できることに注意したい。まず、われわれの分析は統語的移動を仮定しないため、(8)から(14)の例で指摘したような、移動分析にとっての問題点が生じない。また、従来の基底生成分析に対する問題点として指摘した、大主語は常に焦点要素として解釈されるわけではないという事実は、大主語を通例の主語と同様に「場所」の位置に生成するわれわれの分析にとっては問題にならない。さらに、大主語についての特性記述文になっていることが二重主格文の成立にとって重要な性質になるが、この意味的な条件は、「場所」と「存在者」という意味役割構造の枠を仮定するわれわれの分析では、その自然な帰結として導き出すことができる。第3節でみたように、加賀(2001)の枠組みにおいては、「場所」と「存在者」の一つの具現パターンに「所有者」と「特性」の関係が含まれるからである。

本節では、加賀(2001)の意味役割構造に基いた二重主格文の分析を提案し、その利点について考察した。

## 5. おわりに

本稿では、「象が鼻が長い」タイプの二重主格文を取り上げ、従来の分析を批判的観点から概観したあとに、加賀(2001)で提示された意味役割理論の枠組みを踏まえて新たな分析を提案した。

提案された分析は、従来の移動分析および基底生成分析よりも説明力の点で優れていると考えられるが、解決すべき問題もいくつか残されている。その一つは、注7で記したように、われわれの分析では、「場所」要素がもつ「が」格に加えて、「存在者」内の要素も「が」格をもつことになるが、この「が」

格をどのように認可するかという問題がある。本稿では、この問題は今後検討すべき問題として残さざるを得ない。

われわれはここまで専ら、二重主格文を分析の対象としてきたが、よく知られているように、日本語では多重主格文も可能である(注5を参照)。有名な「文明国が男性が平均寿命が短い」などの文を、加賀(2001)の枠組みで説明することはできるであろうか。本稿で提案された分析を採ると、「場所」と「存在者」の位置に「が」格が生起することになるが、3つ目の「が」格はどこに生成されると考えればよいであろうか。この問題をここで詳しく論ずることはできないが、一つの可能性として以下のように考えることができると思われる。従来の基底生成分析は、通常の主語とは別に、焦点(focus)が生成される位置をSの姉妹要素として規定している。われわれは、この基底生成分析を二重主格文の大主語が常に焦点として解釈されるわけではないという理由で採用しなかったが、焦点要素を生成する句構造規則自体を排除したわけではない。多重主格文では、この焦点の位置を利用することが考えられる。つまり、上の文で言うと、「男性」が「場所」の位置に、「平均寿命」が「存在者」内の位置に生成されるのに加え、先頭の「文明国」は「焦点」の位置に生成されるという分析である。この分析は、多重主格文では二重主格文と異なり、先頭の「が」格要素が常に焦点の役割をもつと主張することになるが、今後の慎重な検討が必要ではあるものの、それほど間違った方向の議論ではないように思われる。

#### 注

- 1 以上の多重主格文の種類分けは、杉本(1986)の分類を参考にしている。杉本は、(5)のタイプの主格文を「真性二重主格構文」と名付け、(1)の「ノ型二重主格構文」および(3)の「ニ型二重主格構文」(併せて「擬似二重主格構文」)から区別している。詳しい議論は、杉本(1986)を参照されたい。
- 2 (7)の句構造規則にPPが含まれているのは、「東京からが道路が渋滞する」などの文をカバーするためである。
- 3 「焦点」はSaito(1982)で用いられている用語である。井上(1980)は「強調主題」という用語を使用している。
- 4 意味条件を統語操作に関連付ける一つの試みがUra(1996)にみられる。Uraは、極小主義の枠組みの下で、限定詞句の主要部(D)を2種類に分けることを提案している。譲渡不可能な所有者をとるDは構造格(属格)を付与するのに対して、譲渡可能な所有者をとるDは内在格(属格)を付与するという提案である。Uraはさらに、構造格を照合するDは実際の照合を行なわない可能性をもつと規定して、二重主格文の大主語にな

り得る要素を譲渡不可能な所有者だけに制限しようとしている。Ura のこのアプローチでは、譲渡可能な所有者は常に内在格 (属格) が与えられるので、二重主格文の大主語にはならないことが予測される。しかし、実際には、「田中さんが奥さんが美人だ」 (= 1 c) における親族関係や「山田さんが家が立派だ」 (= 1 d) における譲渡可能所有の関係などの場合にも二重主格文が十分に成立することをみると、Ura (1996) の試みは経験的妥当性に欠けるように思われる。

- 5 (14)の基底構造からは、当然ながら、「文明国が男性が平均寿命が短い」や「日本が経済が停滞が著しい」などの多重主格文が派生される可能性があるが、その派生についてはここでは触れないことにする。多重主格文については、5節の議論を参照されたい。
- 6 日本語では、形容 (動) 詞を述語とするとき、英語と異なり、(連結) 動詞は現れない。(19)の構造において、V<sub>2</sub>の位置には抽象的なゼロの要素があると暫定的に仮定しておく。
- 7 (23)の構造においては、大主語の「が」格に加えて、小節内の「が」格をどのように認可するかという問題が生じる。この問題については、稿を改めて論じる必要がある。

#### 参考文献

- 天野みどり (1990) 「複主格文考—複主格文の意味と成立にかかわる意味的制約—」『日本語学』9: 5, 27-42.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fukuda, Minoru (1991) "A movement approach to multiple subject constructions in Japanese." *Journal of Japanese Linguistics* 13, 21-51.
- 井上和子 (1980) 「格助詞をめぐって」『言語』9: 2, 20-30.
- Kaga, Nobuhiro (1996) "Some remarks on Kuroda's theory of the thetic and categoric judgments." 『筑波英学展望』15, 15-31.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広 (著) 『語の意味と意味役割』(英語学モノグラフシリーズ17) 東京: 研究社, 87-181.
- 金榮敏 (2002) 「日韓両言語の格重出構文をめぐって」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『次世代の言語研究 I』筑波大学, 11-40.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』東京: 大修館書店.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, Shige-Yuki (1972) "The categoric and the thetic judgment; evidence from Japanese syntax." *Foundation of Language* 9, 153-185.
- Kuroda Shige-Yuki (1986) "Movement of noun phrases in Japanese." In Takashi Imai and Mamoru Saito (eds.) *Issues in Japanese Linguistics*. Dordrecht: Foris, 229-

- 271.
- Larson, Richard (1988) "On the double object construction." *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Masuoka, Takashi (1979) "Double subject constructions in Japanese." *Papers in Japanese Linguistics* 6, 219-236.
- Masuoka, Takashi (1982) "Some thoughts on the function of subjectivization in Japanese." *Kwansai Linguistic Society* 2, 52-62.
- Muromatsu, Keiko (1997) "Two types of existentials: Evidence from Japanese," *Lingua* 101, 245-269.
- Saito, Mamoru (1982) "Case-marking in Japanese: A preliminary study." ms., MIT.
- 杉本 武 (1986) 「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (著) 「いわゆる日本語助詞の研究」凡人社, 227-380.
- 杉本 武 (1995) 「大主語構文と総記の解釈」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 「日本語の主題と取り立て」東京: くろしお出版, 81-108.
- Takano, Yuji (1996) *Movement and Parametric Variation in Syntax*. Doctoral Dissertation, University of California, Irvine.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case Marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- 寺村秀夫 (1982) 「日本語のシンタクスと意味 I」東京: くろしお出版.
- Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*. Doctoral dissertation, MIT.
- Yoon, James H.-S. (1987) "Some queries concerning the syntax of multiple subject constructions in Korean." In Susumu Kuno et al. (eds.) *Harvard Studies in Korean Linguistics* 2, Seoul: Hanshin, 138-162.